令和４年度　甲賀市城郭歴史フォーラム

甲賀の中世城館と近江の城

資料集

令和５年２月５日（日）　あいこうか市民ホール

主催：甲賀市教育委員会

令和４年度　甲賀市城郭歴史フォーラム

「甲賀の中世城館と近江の城」

日　　程

開催日　令和５年（2023年）2月５日（日）
会　場　甲賀市あいこうか市民ホール

12:30　　開場・受付開始

13：00～　　主催者挨拶

13：10～13：50　事例報告１　「下坂氏館跡」
　　牛谷　好伸（長浜市歴史遺産課）

13：50～14：30　事例報告２　「関津城跡」
　　藤﨑　髙志（滋賀県立安土城考古博物館）

14：30～15：10　事例報告３　「甲賀の中世城館」
　　伊藤　航貴（甲賀市教育委員会歴史文化財課）

15：10～15：30　休　憩

15：30～16：30　フォーラム「甲賀の中世城館と近江の城」
　　コーディネーター　中井　均（滋賀県立大学名誉教授）
　　パネラー　牛谷　好伸
　　藤﨑　髙志
　　伊藤　航貴

目　　次

事例報告１　北近江城館跡群　下坂氏館跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
牛谷　好伸（長浜市歴史遺産課）

事例報告２　関津城跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
藤﨑　髙志（滋賀県立安土城考古博物館）

事例報告３　甲賀の中世城館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
伊藤　航貴（甲賀市教育委員会歴史文化財課）

北近江城館跡群　下坂氏館跡

長浜市 市民協働部 歴史遺産課
牛谷 好伸

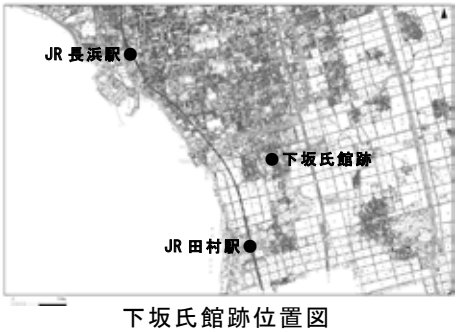
１.はじめに

長浜市の南西部に位置する「北近江城館跡群 下坂氏館跡」（平成 18 年 1 月 26 日指定、平成 19 年 7 月 26 日名称変更、平成 23 年 9 月 21 日追加）は、南北朝期から湖北地方で活躍し、戦国期には京極・浅井両氏に仕えた下坂氏が平地に築いた館で、館内には土塁や堀が良好に残っている。

長浜市の位置

２.地理的環境

琵琶湖に注ぐ姉川によって運ばれた砂礫が堆積して形成された長浜平野の南西部に下坂氏館跡は立地する。下坂氏館跡の南側は、下坂中町集落が広がり、北側は五井戸川が流れ、敷地の北限を区画する。



下坂氏館跡位置図

３．歴史的環境

下坂氏は、建武 3 年（1336）の足利直義の感状などから南北朝期から湖北地方で活躍した国人領主で、戦国期には京極・浅井両氏に仕えている。

浅井氏滅亡後は、帰農するが江戸期は郷士として彦根藩と関わりを持ち、天保年間から医業を開業し最近まで子孫が館跡に居住していた。

令和元年 11 月に、下坂氏館跡の所有者が、史跡の主郭部分（8,513 ㎡）を長浜市に寄付される。

下坂氏館跡　主屋

下坂氏館跡　不断光院

４．下坂氏館跡の現況

下坂氏館跡の主郭は、東西 89m×南北 87m の範囲で高さ 1m から 2m、幅 2m から 5m の二重の土塁が北から西に廻っている。主郭内側の空間は、東西 55m×南北 42m の規模を有する。

土塁の間に設けられた堀の一部には、北側を流れる五井戸川から水を引き入れ、現在も水が流れている。

敷地内には、木造入母屋造ヨシ葺の主屋（18 世紀末建築：3 回の改造有（19 世紀中頃、明治中頃、昭和 30 年代頃））や門、下坂氏の菩提寺である不断光院

（正徳 5 年 1715 建築、浄土宗）などが所在し、往時の景観を維持している。

５．下坂氏館跡の調査

長浜市教育委員会による発掘調査によって 14 世紀から 16 世紀の遺物が出土し、同時期の建物跡・土塁跡・排水路跡・階段状遺構等が検出されている。

表 下坂氏館跡の主な調査

番号	調査年	調査場所	調査内容他
1	平成 6 年 （1994）	全体の測量調査	※平成 8 年（1996）長浜市指定史跡
2	平成 16・17 年 （2004・2005）	試掘調査 （T1～10）	T1 堀の調査 T7～10 階段状遺構 ※平成 18 年（2006）史跡指定
3	平成 19 年 （2007）	試掘調査 （T11～21）	T11 館跡の西側で堀を確認 T15 土塁の調査
4	平成 20 年 （2008）	不断光院下の試掘調査	不断光院の解体修理に伴う調査
5	平成 21 年 （2009）	試掘調査 （T22～28）	T22～24 館跡の東側で堀を確認 ※平成 23 年（2011）追加指定
6	平成 26 年 （2014）	主屋下の試掘調査	主屋の解体修理に伴う調査

６．一般公開

令和元年 11 月に、下坂氏館跡の所有者が、史跡の主郭部分（8,513 ㎡）を長浜市に寄付されたことより、令和 2 年 8 月から一般公開している。

【利用案内】

開 館 日：土曜日・日曜日・祝日（但し 12 月 1 日～2 月末日は休館）

開館時間：午前 9 時～午後 4 時（但し入館受付は午後 3 時 30 分まで）

入 館 料：大人 300 円、小・中学生 150 円

住　　所：長浜市下坂中町 178 番地

連 絡 先：0749-62-0198（六荘まちづくりセンター）

0749-63-4611（月、第 1・3 日、祝は、長浜市長浜城歴史博物館）

【参考文献】

長浜市埋蔵文化財調査資料第 61 集「下坂氏館跡総合調査報告書」長浜市教育委員会 2005
長浜市埋蔵文化財調査資料第 88 集「下坂氏館跡調査報告書 2」長浜市教育委員会 2008
長浜市埋蔵文化財調査資料第 94 集「小規模開発関連発掘調査報告書」長浜市教育委員会 2010
不断光院本堂及び庫裏修理工事報告書 不断光院代表 下坂幸正 2010
下坂家住宅主屋及び門修理工事報告書 下坂家住宅 下坂幸正　2016

写真①（T-2）堀を掘った状況。

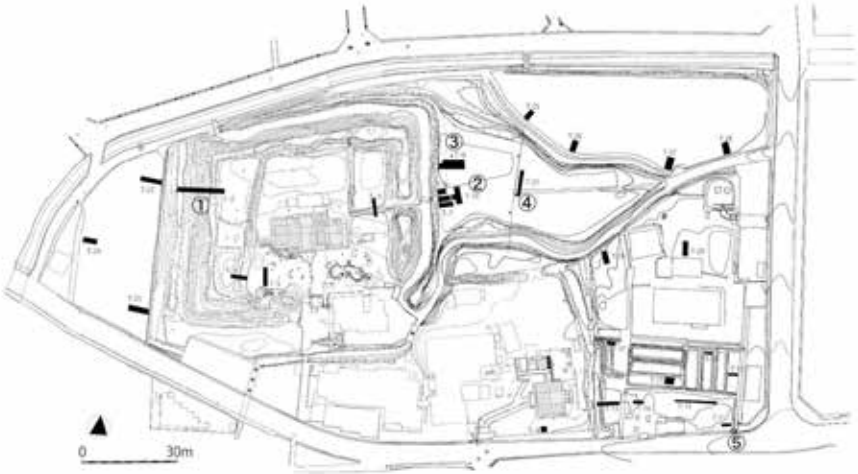


図１　史跡北近江城館跡群 下坂氏館跡　調査位置図　（黒色部分が調査位置）

下坂氏館跡

【指定の流れ】

H8 年：長浜市指定史跡
H18 年 1 月：下坂氏館跡（国の史跡）
H19 年 7 月：史跡名称変更
　　北近江城館跡群
　　下坂氏館跡
　　三田村氏館跡
H23 年 9 月：追加史跡指定

【調査一覧】

H6 年：測量調査
H16・H17 年：確認調査（T-1～10）
H19 年：確認調査（T-11～21）
H20 年：不断光院部分調査
H21 年：確認調査（T-22～28）
H26 年：主屋部分調査

※調査があって、指定に繋がる。

図２　①T-2 壁断面図

堀の底から土塁の上まで 3.3m の高さがある。堀の底から主郭内は見えない。

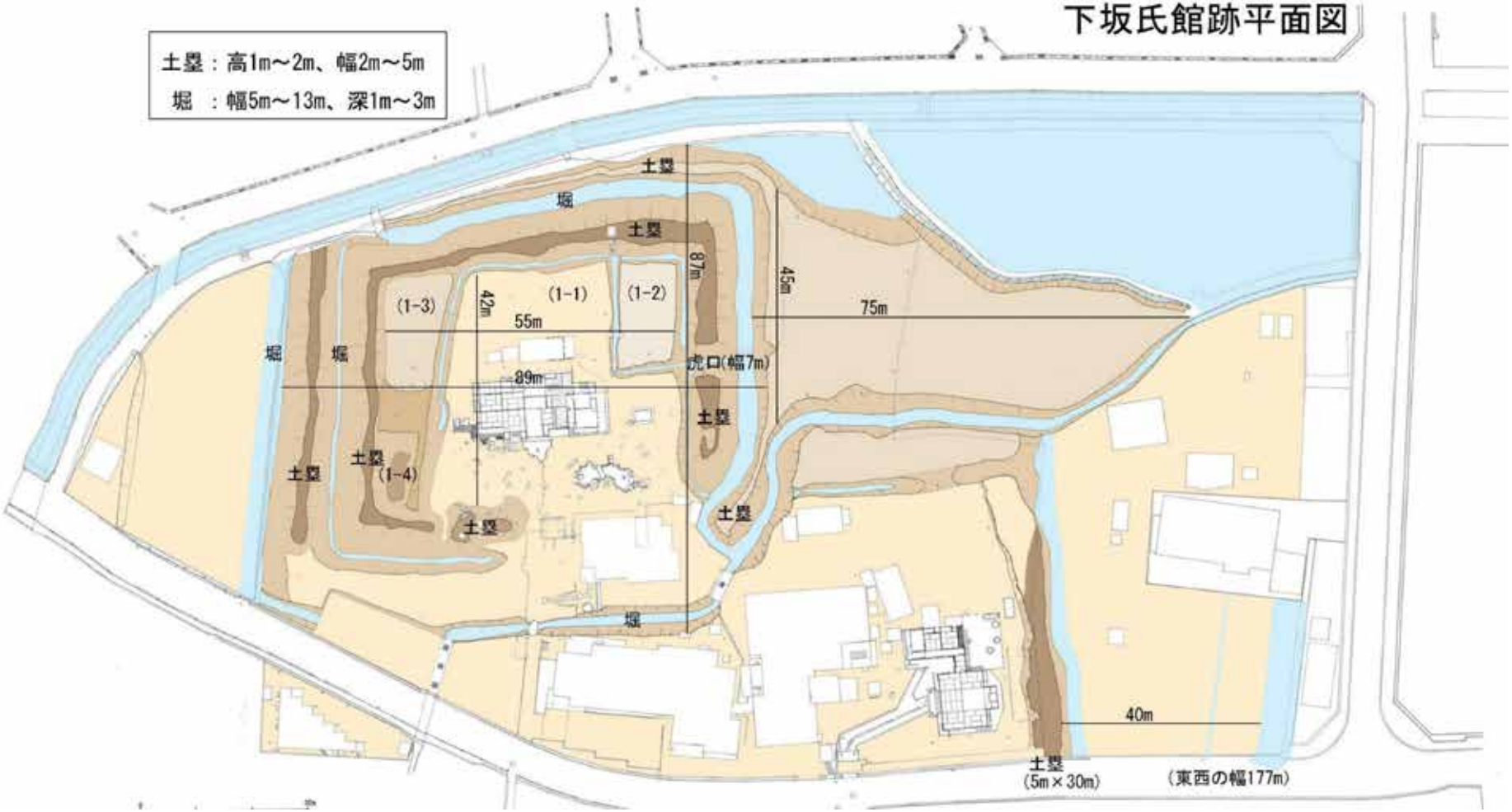
写真④（T-21）多数の柱穴が見つかる。

写真⑤（T-11）堀が見つかる。

写真②（T-8）虎口の向かいの調査区。階段状遺構が見つかる。

写真③（T-6）多数の柱穴や溝が見つかる。

下坂氏館跡平面図


土塁：高1m～2m、幅2m～5m
堀　：幅5m～13m、深1m～3m
土塁
堀
(1-1)
(1-2)
(1-3)
(1-4)
42m
55m
89m
87m
45m
75m
虎口(幅7m)
40m
土塁
(5m×30m)
(東西の幅177m)

関津（せきのつ）城跡

滋賀県立安土城考古博物館
藤﨑髙志

はじめに

関津城は、滋賀県大津市の南部、琵琶湖から唯一流れ出る河川である瀬田川に信楽から流れ出た大戸川が合流する地点からやや下流の左岸、田上山系の支峰のひとつ笹間ヶ岳から派生した標高 100 ～ 125 mの古琵琶湖層で形成された丘陵先端部に立地する。

この城は、承久の乱（1221 年）に戦功をたてた宇野源太郎守治が恩賞として与えられ、その後、子孫が当地に住み守護したとされている。

城跡は、方形に巡る土塁が残っているため遺跡として周知されていたが、詳細は不明な状況であった。

平成 21 ～ 23 年度に国道 422 号補助道路整備事業に伴い 12,750 ㎡を対象として滋賀県教育委員会が調査主体、公益財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関として発掘調査を実施した結果、関津城は、16 世紀後半の城郭（城館）であることが明らかとなった。

1　曲輪Ⅰ

丘陵先端部に位置し、東・北・西の三方を土塁、南側は曲輪Ⅱ・曲輪Ⅲと切岸で画し、南西隅に外枡形、平入りの虎口と櫓台をもつ曲輪で、規模は東西約 40 m、南北約 20 ～ 26 mである。土塁は、地山を削り出した部分が高さ 1 m程度残存し、盛土部分は失われていた。

曲輪内では、方形土坑 2 基、井戸（深さ 5 m以上、検出面から約 4 mまで素掘り、それ以下は石積み）1 基、土塁裾と切岸裾で排水溝、幅 3.6 mの虎口で四足門の構造をとる櫓門の礎石と柱穴、虎口北の櫓台直下で昇降用とみられる石段が検出された。石段には石仏一体が転用され、石材の一部に被熱を確認している。なお、石材はすべて搬入品である。

遺物は、五輪塔や宝篋印塔片、石仏 2 点、茶臼 1 点、鉄製小札 2 点、鉄釘 16 点以上、土師器（皿 13 点、花瓶 1 点、風炉 1 点、羽釜 2 点）、瓦質土器の香炉 1 点、信楽（擂鉢 10 点、壺 2 点、甕 1 点）、瀬戸美濃（天目碗 4 点、皿 2 点）、輸入陶磁器（染付の皿 5 点、白磁の皿 3 点、小杯 1 点、碗 1 点、青磁の碗 1 点）など 16 世紀後半のものを主体に 13 ～ 17 世紀のものが出土している。

この曲輪では、建物に伴う礎石や柱穴は検出されなかったが、井戸が設けられ、土器類は日常雑器が多いなどの点から、家臣や使用人の居住が想定される。

2　曲輪Ⅱ

丘陵西側、曲輪Ⅰの南に位置し、西・北側は土塁、南・東側は切岸で画し、北側の土塁

中央に平入り虎口を設けた曲輪で、規模は東西約 30 m、南北約 30 mである。土塁は地山を削り出しで高さ 2 m程度が残存する。虎口は調査区外であるが、開口部の土塁裾に 2 ～ 3 段の石積み、開口部から外枡形までの通路で石段が確認された。発掘調査は曲輪の約 1/3 について実施。

遺構は、切岸裾に沿う排水溝、北側土塁が東側切り岸に接続する地点で土塁内部をトンネル状に刳抜いた排水用の暗渠（大人が普通に通れる規模）、礎石建物、蔵構造建物とみられる礫敷きの礎石建物 1 棟、その下層で埋甕土坑を内部に持つ礎石建物 1 棟、井戸 1 基、焼土坑、集石土坑などが検出されたが、建物に伴う柱穴は検出されていない。また、焼土、整地土、一部の礎石に被熱が認められるため 1 ～ 2 回火災に遭っていると考えられる。

礎石建物は、一部の礎石しか原位置を留めていないため規模は不明であるが、南北に 3 棟が並ぶ配置で、3 棟とも 2 ～ 3 回の建て替えが行われている。また、被熱した壁土が広範囲出土していることから、複数の建物が土壁を採用していた可能性が高い。整然と配置された礎石建物は、出土遺物に貯蔵具や威信財が多数含まれ、地点ごとに組成が異なっている、未調査の西側部分に主屋建物が想定されるなどの点から、北側の建物が酒などの貯蔵施設（蔵）、中央が井戸を伴う厨房施設、南側が武具や調度品など威信財の収納施設（蔵）と考えられる。

遺物は、南側の礎石建物一帯の焼土や壁土を含む整地土層、埋甕土坑、井戸などから、銅製装飾品（屏風の押縁、鋲、飾金具、蝶番、亀形銅製品、双耳壺など）、冑の一部（鉄製小札 6 点、脇板 1 点、銅製鞐 3 点）、直刀 1 点、鉄釘 70 点以上、鎹 3 点以上、火打金 1 点、鉄鍋 2 点、漆器 1 点、土師器（皿 150 点以上、台付皿 3 点、羽釜 1 点、鍋 2 点、火入れ 1 点、風炉 1 点、ミニチュア羽釜 2 点）、瓦質土器（火鉢 1 点、風炉 2 点、羽釜 1 点）、信楽（壺 9 点、甕 18 点、擂鉢 37 点、水指 4 点）、備前（大甕、徳利 2 点）、瀬戸美濃（皿 15 点、天目碗 12 点、碗 2 点、徳利 2 点、鉢 1 点）、輸入陶磁器（染付の皿 21 点、碗 8 点、青磁の皿 1 点、碗 3 点、盤 1 点、白磁の皿 41 点、杯 4 点、碗 1 点、鉢 1 点）、朝鮮王朝陶磁器（白釉瓶 1 点、舟徳利 2 点、魚々屋茶碗 2 点）、茶臼 2 点、唐臼 1 点、砥石 1 点、銭貨 10 点など 14 ～ 17 世紀の遺物が出土しているが、16 世紀後半のものが主体を占める。

3　曲輪Ⅱ上段

曲輪Ⅱの南側上段に位置し、四方を切岸で画した曲輪で、高低差のある上下２段の平坦面からなり、規模は東西約 20 m、南北約 15 mである。

上段では、内法が約 4 m × 3 mの規模で、北側を出入り口、地覆石を基礎とし幅約 30㎝、残存高さ約 20 ㎝の土壁が残る蔵構造建物が検出され、内部から炭化穀類、鉄釘、炭化材、被熱した壁土片や屋根土片が出土した。建物の構造は江戸時代の土蔵の建築技法に類似する。

なお、この建物は麓の集落から見通せる地点に位置し、出入り口は集落側に設けられている。

遺物は、炭化穀類（イネ、ムギ、ソバ）、鉄釘（80 点以上）のほか、少量だが輸入陶磁器（青磁の皿 1 点、白磁の皿 4 点、染付の皿 1 点）、瀬戸美濃の端反皿 1 点、信楽の水指 1 点など 16 世紀代のものが出土している。出土遺物中、最新のものが 16 世紀第 4 四半期の漳州窯系白磁皿であることから、土蔵造り建物の火災による廃絶はこの頃と考えられる。

下段の平坦面は、侵食で大部分が流失しているため遺構は確認できなかったが、切岸直下に一部残存した箇所では五輪塔が出土し被熱面を検出した。下段は、建物の配置が可能な面積を有するが、礎石建物が存在した可能性は低いと考えられる。なお、この下段の直上、西側尾根上では、鎌倉時代の蔵骨器（褐釉陶器の四耳壺）を検出している。

4　曲輪Ⅲ

四方を土塁で囲み、北側土塁の西寄りに平入り虎口、南は堀切で画し、土塁の三方に帯曲輪を巡らせた城内で最も高所に位置する曲輪で、内部の規模は一辺約 13 ｍである。

土塁は基底部幅 3.7 ～ 6.5 ｍ、最大残存高さ約 2 ｍ、削り出し箇所のみが残存し、盛り土部分は失われている。帯曲輪は残存幅 2 ～ 3 ｍ、堀切は幅約 5 ｍ、残存深さ約 1 ｍ、断面形状は台形である。

帯曲輪は、浸食や崩落で狭まっており、当初規模は不明であるが、虎口全面は舌状に張り出していた可能性が高い。

虎口で掘立柱の門跡、曲輪内で堀立柱建物 2 棟、柵、礎石建物、石組土坑などを検出した。堀立柱建物は 4 間× 2 間の南北棟と東西棟の建物で、同時期の可能性も否定できないが、東西棟建物と礎石建物は一部重複し、東西棟建物が礎石建物に先行すること、南北棟建物との位置関係などから、当初に東西棟建物、その後に南北棟建物と礎石建物の 2 棟に建て替えられた可能性が高いと考えられる。

遺物は、土師器の皿 40 点以上、奈良火鉢 1 点、信楽（鉢擂 8 点、甕 1 点、壺 2 点）、瀬戸美濃（皿 3 点、天目碗 3 点、舟徳利 1 点）、備前の建水 1 点、輸入陶磁器（白磁の皿 2 点、青磁の碗 1 点）、石臼 1 点、小札 9 点、鉄釘 30 点以上などが出土している。磁器は 15 ～ 16 世紀のもので、16 世紀後半のものが多数を占める。

5　曲輪Ⅱ・曲輪Ⅲ南側の空閑地

造成面や遺構、後生の大規模な改変は確認されないため、地形から推測すると、城が機能した時期も空閑地であったと考えられるが、曲輪Ⅲに接する南側調査区外の平坦地については、何らかの施設が設けられた可能性がある。

6　城域、集落

曲輪Ⅲの堀切から約 75 ｍの地点で、幅 5 ｍ、深さ 1.7 ｍの堀切、堀切から西の谷底に向けて斜面に沿って延びる断面形状を台形に掘り込んだ幅約 5 ｍ、延長 50 ｍ以上の空堀、

地山を削り出した土塁を検出した。また、調査区外の堀切東側においても谷底に向かって延びる溝状の窪みが確認されるため、東側にも西側と同規模の空堀が推定される。

城の南を画する堀切の南側には、小規模な谷と尾根が連続する地形が続くが、これを畝状竪堀群とする意見もあったため調査を行った結果、この地形は山林荒廃に伴う斜面の浸食により形成されたものであることが確認された。また、城の東側と西側を画し南北に延びる平坦な谷は、江戸時代に進行する山林荒廃により流失した土砂の堆積（5 m以上）によって形成されたものであり、城が機能した時期は急峻な谷川であったことが確認された。

関津城の城域は、調査結果や周囲の地形から、南辺は堀切と空堀、東辺と西辺は北流する谷川、北辺は流路を変更して堀とした河川（嶽川）に画された範囲と考えられることから、規模は東西約 150 m、南北約 200 mとなる。

関津城の北、嶽川を挟んだ平野部に集落が展開するが、発掘調査の結果、嶽川の流路を付け替え埋め立てた造成地では堀で区画した屋敷地が検出された。その時期は出土遺物から 16 世紀代と考えられことから、城の整備と同時に集落でも大規模な再編が行われた可能性が高い。

おわりに

関津城が位置する場所は、近江と山城や大和とを結ぶ陸路の田原道（東山道）、水路の瀬田川に接し、関（関津峠）と港（関津・関津浜）が置かれるなど水陸交通の結節点であると同時に、瀬田川を唯一徒渉できる軍事的にも重要な供御瀬（瀬田川と大戸川の合流点付近）を抑える地点に立地する。また、瀬田川の対岸の滋賀郡は、石山寺、園城寺、延暦寺、日吉大社などの勢力が強い地域であるため、瀬田川は国境ともいい得る川である。

城主の宇野氏は、近江守護六角氏の重臣青地氏に付属しつつも、台頭する瀬田城の山岡氏と親密な関係にあり、園城寺や石山寺とも密接な関係にあり、幕臣でもあるなどの徴証があるものの、不明な点が多い。

＊『栗太郡誌』山岡氏系図（備後福山阿部家士山岡氏本）

景冬（山岡美作守）

山岡美作守景冬幼少ニ而父因幡守卒ス故ニ宇野源太郎清治入道玉林斎居城田上嫡子宇野光治ニ譲り而勢田之城ニ住シ而山岡玉林斎ト號シ景冬ガ後見ト成ル景冬成長之後玉林斎ハ勢田近辺ニ安居ス景冬一生勢田の城ニ住シ而将軍家ヲ守護シ而有軍功

某（山岡右近）

母ハ水原長門守平ノ重久娘也実は宇野清治カ二男宇野源之丞國治カ嫡子也二才ノ時ニ父國治卒ス其妻再ヒ山岡景隆ニ嫁ス景隆以右近為養子山岡ヲ名乗ラシム

＊『寛政重修諸家譜』山岡氏系図

景就（景澄　因幡守）　妻は宇野源太郎清治の女

景之（景冬　美作守）　母は宇野源太郎清治の女、妻は和田惟政の女
景隆（美作守）母は和田惟政の女、妻は水原河内守重久の女
水原河内守重久の女の最初の夫は宇野源之丞國治
景隆の男景興（右近）の父は宇野源之丞國治
景猶（玉林斎　備前）

京都将軍につかへ、勢多に住し、のち石山城に移り住す。永禄年中織田右府に属し、伊勢の国司北畠を討のとき兄とともに力戦す。元亀元年十二月近江国のうちにをいて二千五十石を領すべき旨の朱印をあたへらる。二年九月右府兵を出して比叡山をせむ。是時景猶が勢多の邸に陣す。三年七月近江国に一揆おこり、大吉寺山にたてこもる。景猶右府の命をうけ、海津、塩津、余呉の入海に船揃して江北の敵地を焼、船を竹生嶋によせて火砲をはなちてせむ。一揆等ことごとく遁れるさる。天正元年七月右府義昭の眞木嶋の館をせむ。景猶進みてこれを破る。是年朝倉を討のときは先鋒となる。後豊臣太閤に属し、十一年兄とともに退けられ、石山城を去て加藤清正に属す。のち東照宮の仰せによりて越前中納言秀康卿につかふ。四年死す。

これまで近江の戦国期城郭の研究は、観音寺城、小谷城、安土城など保存状態が良好な大規模城郭が中心であり、在地の小規模城郭（館城）は発掘調査の事例が少なく縄張や表面観察に頼らざるを得ない状況にあったが、本事例は全体構造が把握できるため、今後、小規模城郭を考える上ではモデルケースの一つになると考えられる。しかし、内部構造の解釈、城主の実像など解くべき課題は多い。

参考文献

・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『ほ場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書に伴う発掘調査報告書 37-4　関津遺跡Ⅲ』（2010 年）
・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『国道 422 号道路改築事業に伴う発掘調査報告書　関津遺跡 2』（2015 年）
・滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『国道 422 号補助道路整備工事に伴う発掘調査報告書　関津城遺跡』（2016 年）
・滋賀県立安土城考古博物館『発掘された近江　関津遺跡と関津城跡』（2021 年）
・『近江栗太郡誌』巻 2・巻 3（1972 年）
・『新訂　寛政重修諸家譜』第 17（1965 年）
・新谷和之「下笠覚書（大阪公立大学蔵）『市大日本史』25 巻（2022 年）

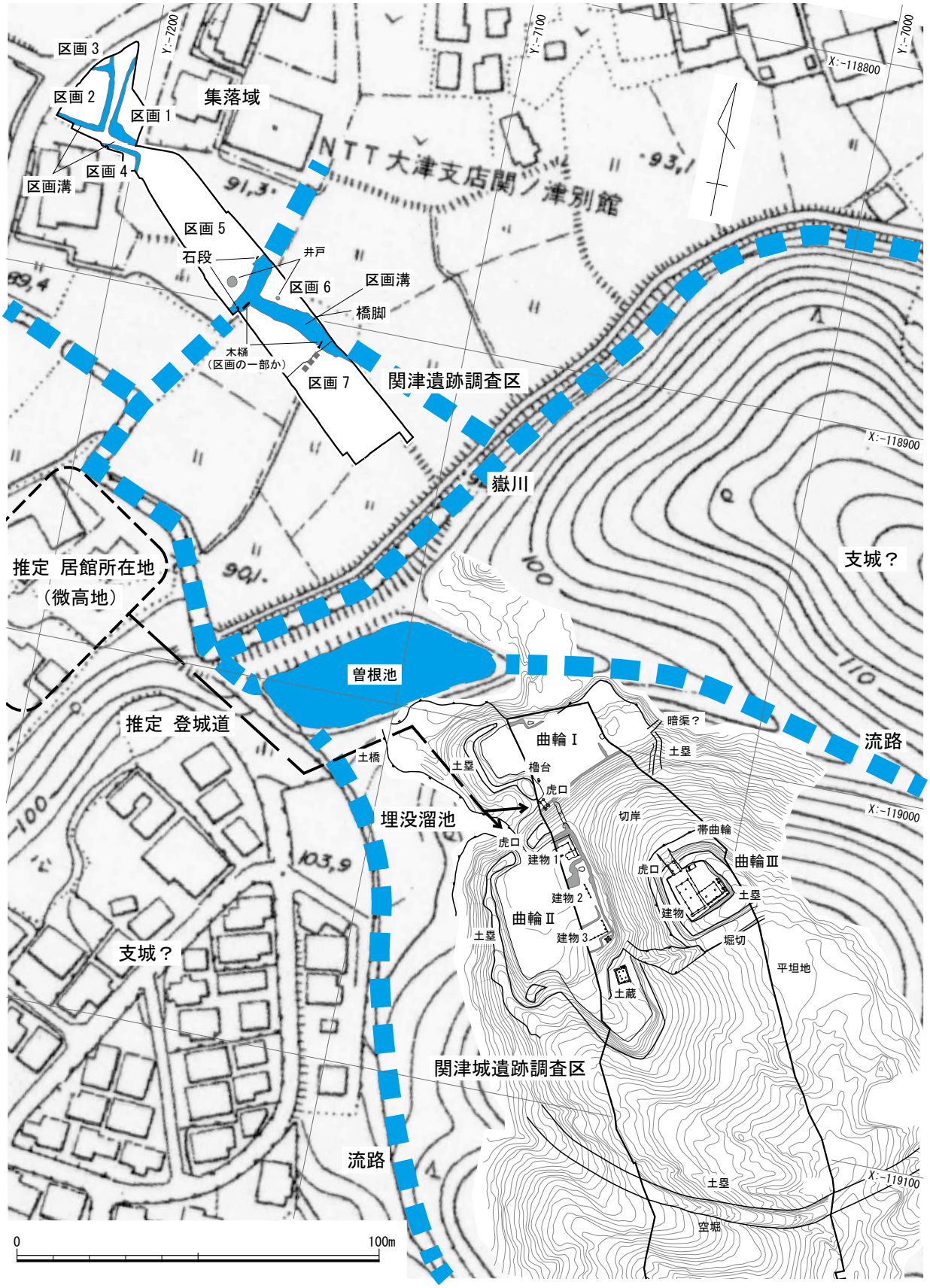


図1　関津城遺跡・関津遺跡　主要遺構配置図

『国道 422 号補助道路整備工事に伴う発掘調査報告書　関津城遺跡』2016 掲載図を一部改変）

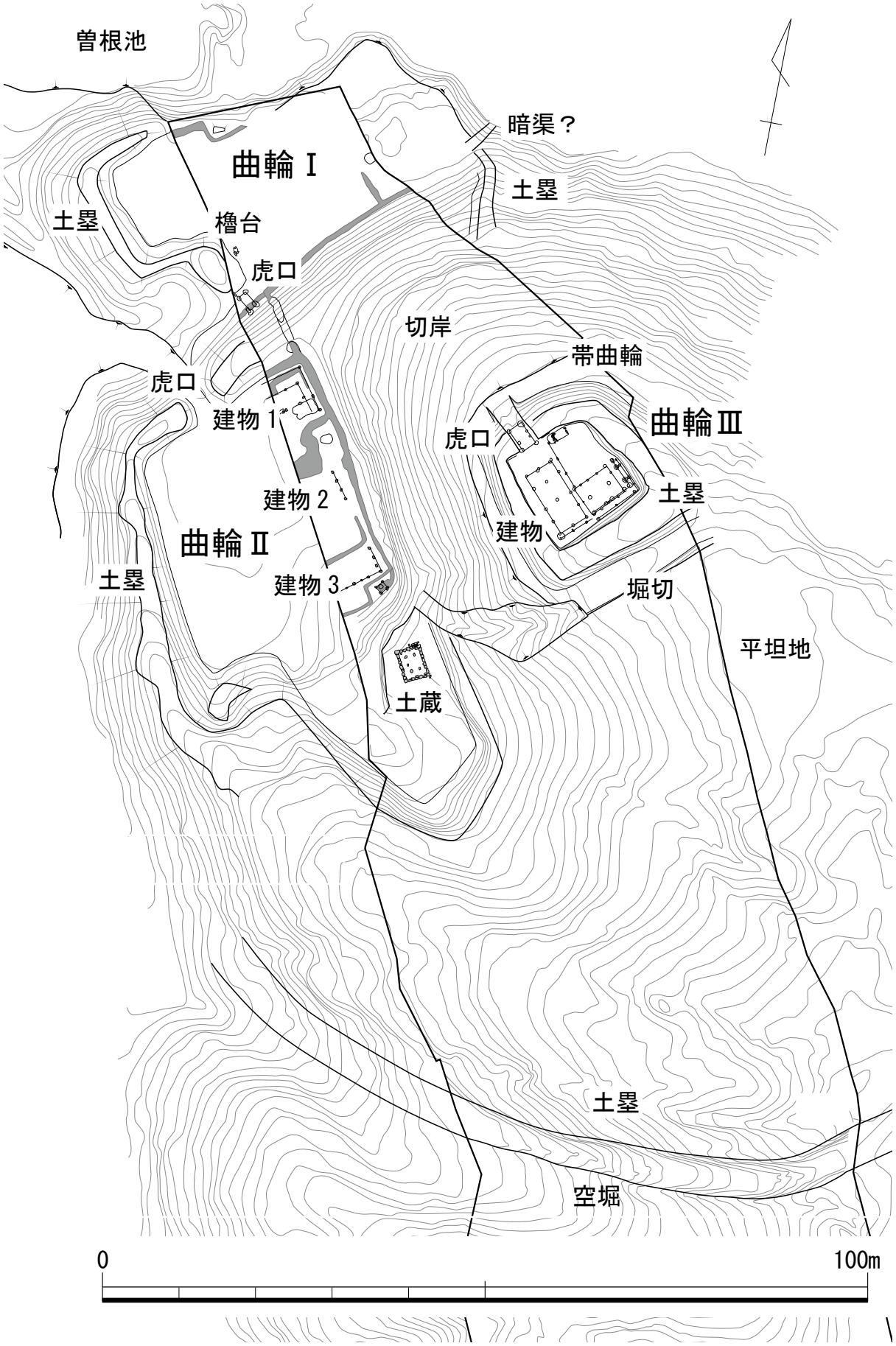

曽根池
暗渠？
曲輪Ⅰ
土塁
土塁
櫓台
虎口
切岸
帯曲輪
虎口
建物1
曲輪Ⅲ
虎口
土塁
建物2
建物
曲輪Ⅱ
土塁
建物3
堀切
平坦地
土蔵
土塁
空堀
0
100m

図2　関津城跡 主要遺構

写真1　調査前の関津城跡

写真2　調査前の関津城跡（曲輪Ⅲ）

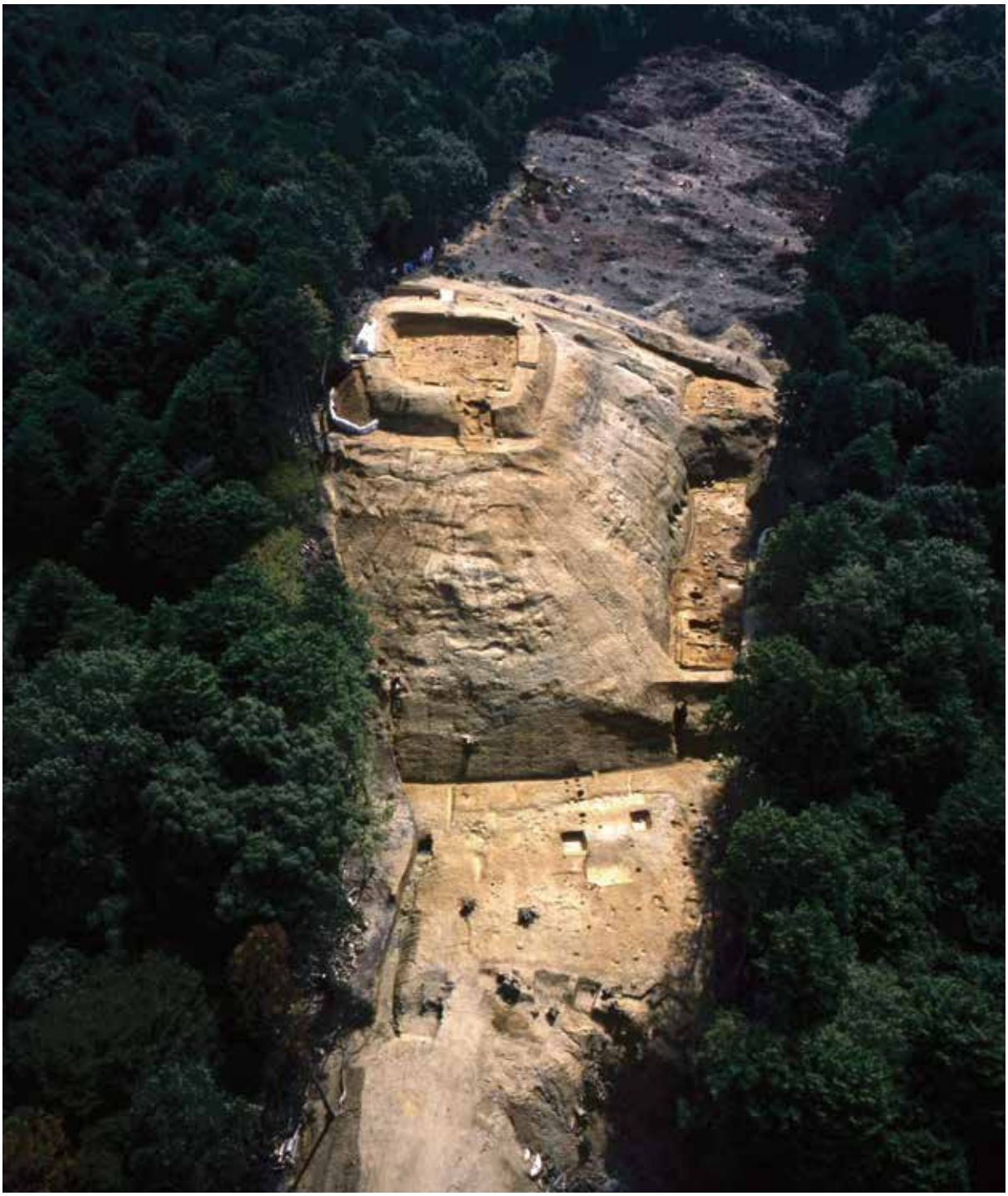


写真3　関津城跡（曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）

写真 4　曲輪Ⅰ　土塁と櫓台

写真 5　曲輪Ⅰ　櫓台の石段

写真 6　曲輪Ⅰ　櫓門の礎石と柱穴

写真 7　曲輪Ⅱ　井戸（深さ 5m以上）

写真 8　曲輪Ⅱ下段　礫敷の蔵跡

写真 9　曲輪Ⅱ下段　酒蔵跡

写真 10　曲輪Ⅱ上段　土蔵造建物跡

写真 11 曲輪Ⅱ上段 土蔵造建物の地覆石

写真 12　曲輪Ⅲ

写真 13　曲輪Ⅲ　建物跡

写真 14　城の南側の空堀と土塁

写真 15　城の南側の空堀と土塁

写真 16　上空からみた関津城跡

写真 17　土蔵造り建物の壁土

写真 18　銅製の飾り金具

甲賀の中世城館

甲賀市教育委員会事務局歴史文化財課
技師　伊藤　航貴

はじめに　～甲賀の城～

・市内には約 180 ヶ所の城跡を確認しており、ほとんどが石垣や天守を持たない、土造りの城。

・甲賀の城の特徴⇒高い土塁と空堀を備えた半町四方の単郭方形を基本形としている。これらの城は、集落内部の平地や背後の丘陵上に立地するが、多数の城が単郭方形であり、規模も似た城である。

1. 平地に築かれた方形城館

◎貴生川遺跡の城館

位置：水口町貴生川に位置し、杣川右岸の河岸段丘上に立地する。

時期：16 世紀後半に築城もしくは改修、17 世紀前半に廃絶

遺構：曲輪は約 26 m×約 30 mで、いわゆる館城タイプ。堀は幅約 6 m、深さ約 2.6 m～2.8 mで、土塁の基底部は幅約 6.5 ～ 8 m、曲輪の内部からは溝や石組井戸が見つかっている。

遺物：信楽焼・瀬戸焼・美濃焼・中国製陶磁器などが出土。

貴生川遺跡の城館は、発掘調査によって初めて明らかとなった城であり、これまで言われてきた甲賀の城の特徴がよく表れている。この城館が機能した時期は、16 世紀後半を中心とし、17 世紀前半には埋没している。築城の背景としては、織田信長の近江侵攻と考えられ、甲賀衆が連携し郡中惣を組織した時期であり、信長に対抗するために、築城もしくは改修されたと考えられている。

◎竹中城

位置：甲南町新治の倉治集落の北西に位置し、杣川左岸の河岸段丘上に立地し、西側には杉谷川が流れる。

時期：築城時期不明だが、16 世紀後半頃と推定。

遺構：土塁の外側には幅約 5 m、深さ約 1.4 ～ 1.8 mの空堀が巡る。曲輪の内部は東西約 32 m、南北約 32 mであり、土塁外側まで含めると東西約 62 m、南北約 58 mを測る。土塁の高さは約 5 mで、上面での最大幅は約 3.5 mである。

土塁の南側中央には開口部があり、虎口と考えられる。また北東隅にも開口部があるが、これは後世の破壊とみられる。

平地の方形城館として挙げた貴生川遺跡の城館と竹中城は、よく似た構造であることがわかる。どちらも杣川の河岸段丘上に立地し、曲輪の大きさや堀の深さは同規模である。

竹中城では発掘調査を実施していないが、地表面観察で井戸のようなくぼみも確認できる。貴生川遺跡の城館では、土塁は削平されているが、竹中城と同じくらいの高さであったと考えられる。

２．丘陵に築かれた方形城館

◎下山城

位置：水口町下山の小字市場。水口丘陵の北側の尾根端部に立地する。集落との比高差は約 15 mである。

城主：城主は伴谷地域に勢力をもった伴氏と伝わっており、北に 100 mの地点には伴屋敷跡がある。また、伴氏が創立したという寺伝のある浄土宗九品寺があり、伴氏の本拠地と考えられる。

時期：16 世紀築城か？

遺構：高さ約 5 mの土塁で四方を囲んだ東西約 50 m、南北約 55 mの主郭があり、東側には横堀を設けている。横堀の深さは、土塁の上端から約 5 m、城の外側からは約 1～2 mを測る。主郭には南北の土塁の東寄りに開口部があり、虎口と考えられる。

下山城では、発掘調査を実施しておらず、採集されている遺物もないことから、明確な築城時期は不明であるが、他の城との比較から 16 世紀には築かれていたと考えられる。

◎新宮城・新宮支城

位置：甲南町新治に位置し、磯尾川の西側丘陵の先端部に築かれている。新宮城の南に約 50 mの谷を隔てた場所に新宮支城は築かれ、「二城並列型」の城館構造をしている。

新宮城：主郭が土塁内側で東西 25 m、南北 30 mを測る。土塁の高さは約 4 mで、上部幅は約 7 mを測る。土塁の南東部には開口部があり、虎口と考えれている。主郭の南東部には巨大な堀切を構え、尾根を遮断する。北側にも横堀を設けている。

主郭の東には階段状に曲輪が配置され、L 字状に曲がる桝形虎口も確認できる。

築城当初は主郭のみの単郭方形に構えられていたものが、副郭以下の曲輪を設け、桝形虎口を導入したと考えられている。

新宮支城：主郭は方形で四方に土塁を巡らしている。土塁内側は東西約 18 m、南北約 30 mを測る。土塁の高さは最も高いところで内部から 10 mにも及ぶ。

主郭の南側には尾根を遮断する堀切を設け、北側にも巨大な堀切が設けられている。

・新宮城・新宮支城のような「二城並列型」の城が、甲南町杉谷・新治地区には集中して存在する。これは旧守護家の六角氏との関係が提議されている。
・六角亡命政権の軍勢を入れる城と、彼らを迎い入れる甲賀衆の城を分けて、それぞれの独自性を生かした作戦を保持するためにこれらの形が選ばれたと考えられている。

３．甲賀の方形城館

・平地の城⇒ほぼ正方形である。また、外側には副郭を設けず、土塁と堀を備え、防御機能を高めた館のような様相である。
・丘陵上の城⇒地形の制約がある中でも、方形にしようとする意図がうかがえる。また、主郭の外側にも曲輪を設ける点は平地の城との違いでもある。

・甲賀の方形城館では、発掘調査事例が少ないことから、曲輪内部で明確な建物跡を確認していない。
・貴生川遺跡でも曲輪内部は半分程度の調査であり、どのような建物があったのか、現時点で不明である。しかし、堀や井戸からは信楽焼の擂鉢や漆器、水指、水滴などが出土しており、生活の様子がうかがえる。
・貴生川遺跡の城館では、東側の隣接地で鎌倉時代の方形の屋敷跡を確認している。この屋敷は二つの溝で囲まれており、溝の間には土塁状の構造物の存在が指摘されている。
・甲賀の中世集落から城館への流れを明らかにする上で、貴生川遺跡の調査成果は重要であり、城館を築く土木技術があったことを示唆するものであると考えられる。
・丘陵上の方形城館でも明確な建物跡が確認された例はない。

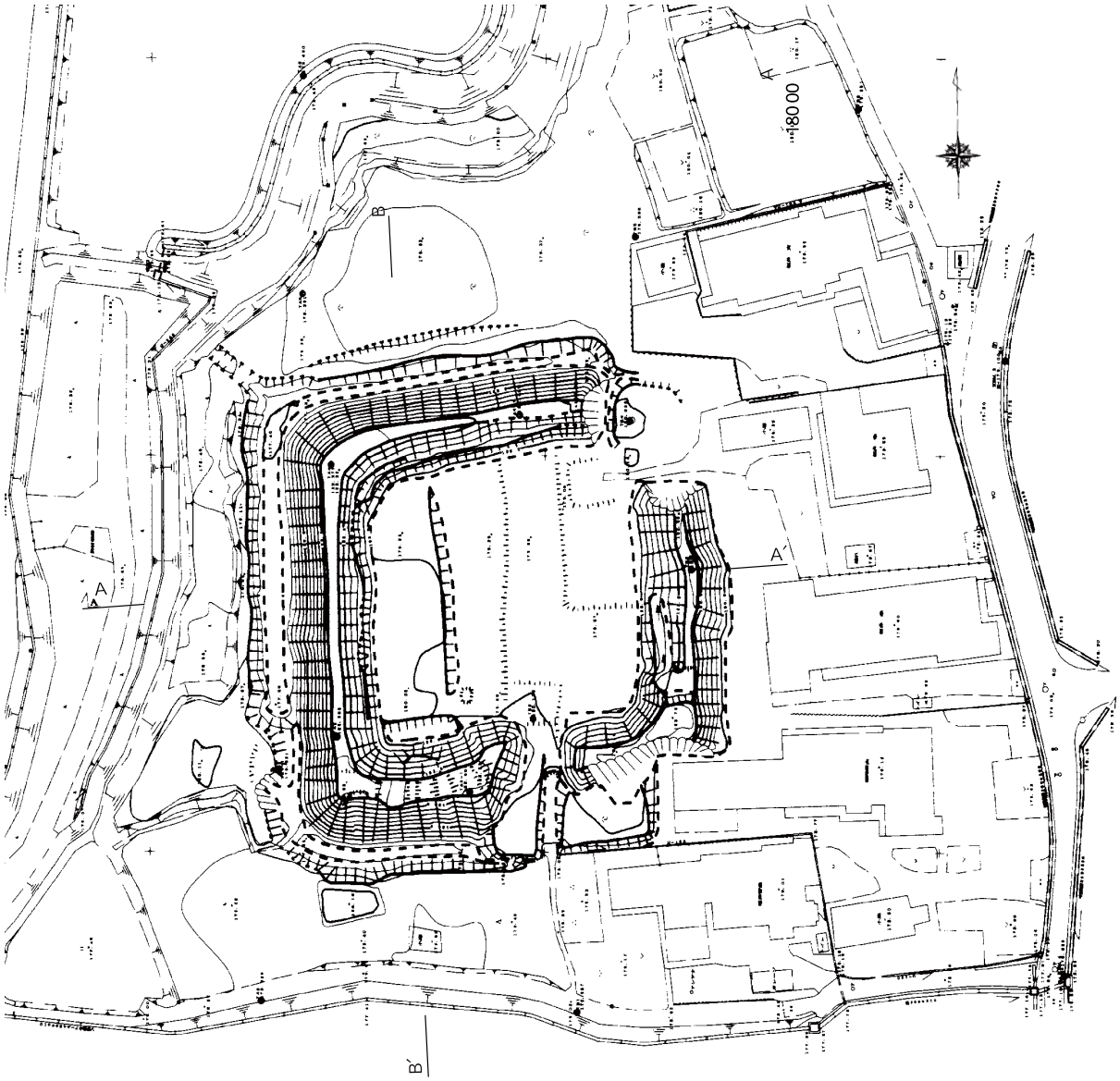
おわりに

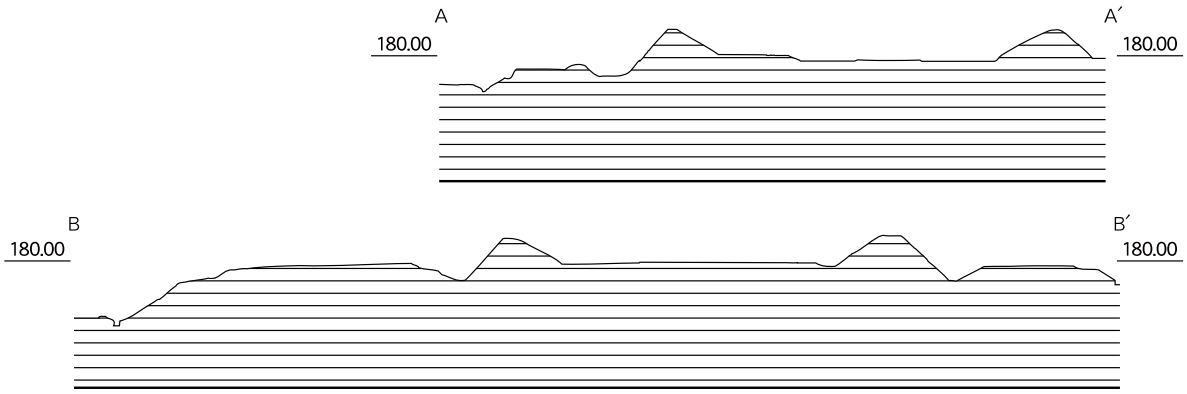
【参考文献】

甲賀市教育委員会 2018『貴生川遺跡第 4 次発掘調査報告書』
甲賀市教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2017『貴生川遺跡発掘調査報告書』
甲賀市史編さん委員会 2010『甲賀市史』第 7 巻 甲賀の城
甲賀市教育委員会 2008『中世城館遺跡（甲南地域）調査報告書』

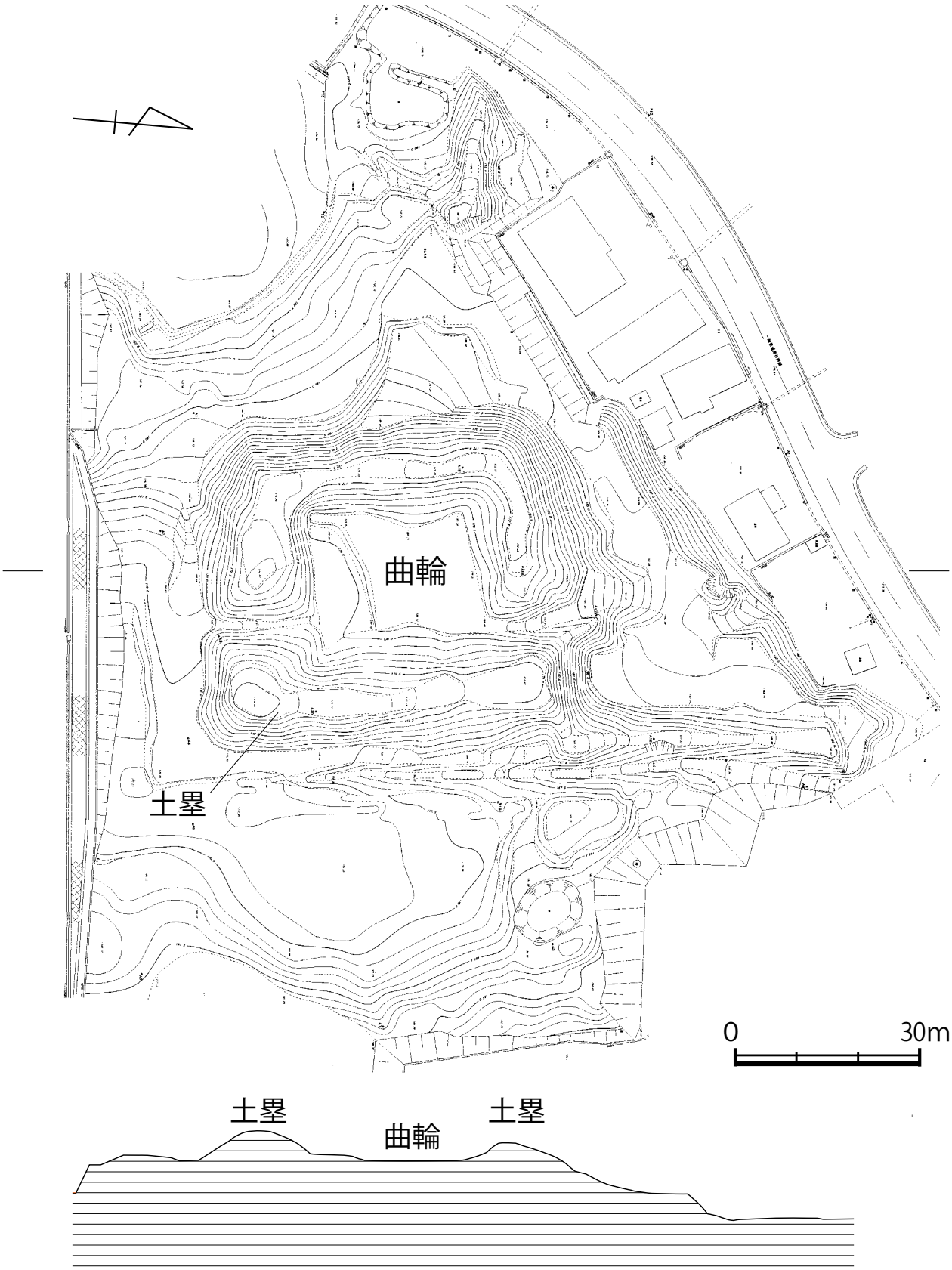
貴生川遺跡の城館　平面図

貴生川遺跡　空中写真

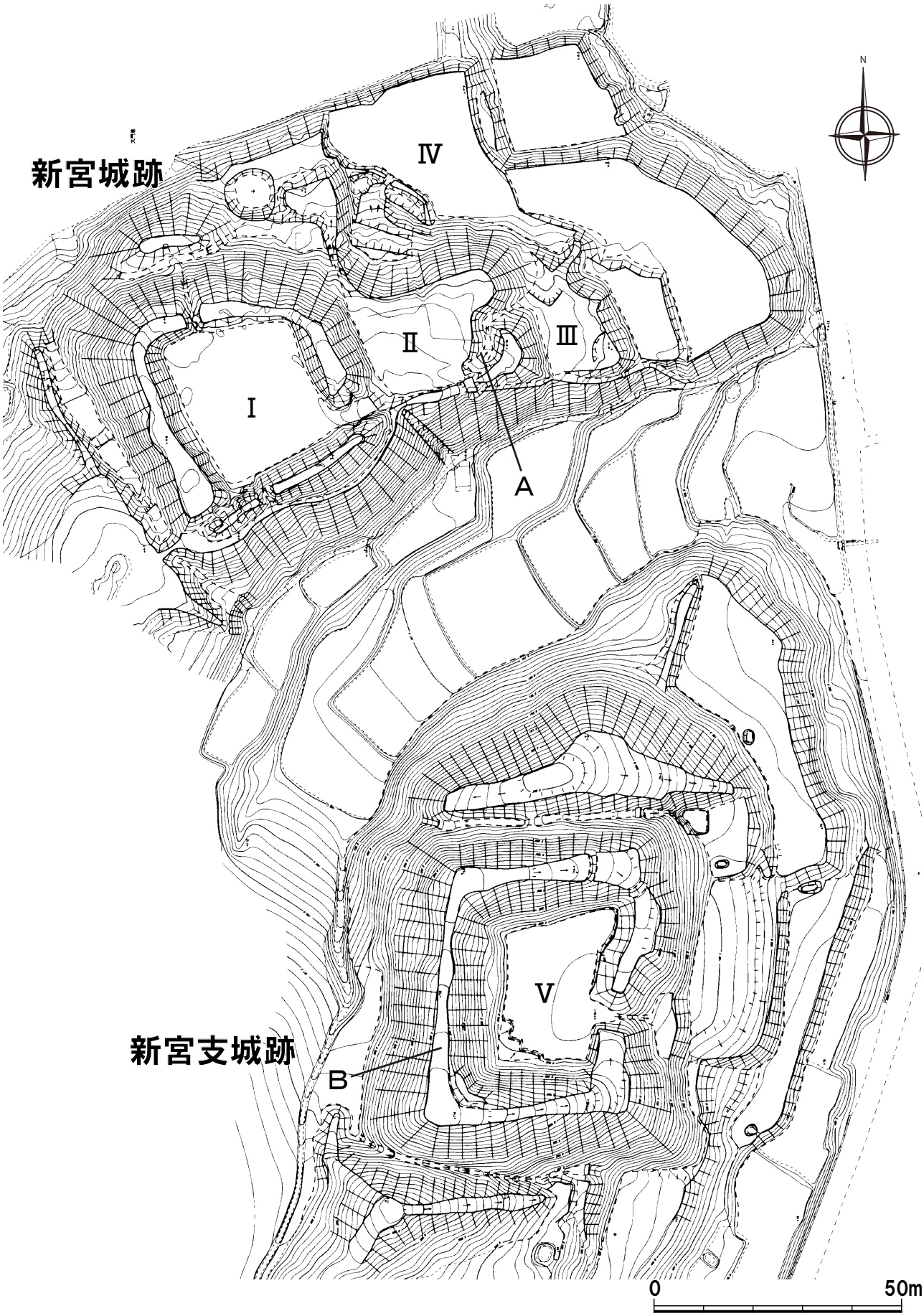




竹中城跡　測量図



下山城跡　測量図



新宮城跡・新宮支城跡　測量図

≪ MEMO ≫

令和４年度　甲賀市城郭歴史フォーラム
「甲賀の中世城館と近江の城」
資料集

令和５年２月５日発行

編集発行　　甲賀市教育委員会
滋賀県甲賀市水口町水口 6053